あたしたちはがむしゃらに生きていくんだ！

和泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あたしたちはがむしゃらに生きていくんだ！

【Ｎコード】
Ｎ６３７３Ｙ

【作者名】
和泉

【あらすじ】
人は人生最大の絶望をし、崖っぷちに立たされた時に何を思うんだろう。あなたならどうする？何も考えない？死にたいと思う？それとも・・・１５年しか生きていない少女は人生で一番大切な事を崖っぷちで思い出した。自分の歌が。勇気が。人に影響を与えていく力強い物語。

朝食（前書き）

はじめまして和泉です。
この話は書くことをためらいずっと心の隅に隠していました。
けどどうしても書こうと思い、画面に向かっています。

今悩んでいたり、主人公と同じ立場にいる人に少しでも力を与えられますように。

朝食

朝、目が覚める。昨日遅くまで起きていたこともあり、何となく瞼が重い。
油断するとするに睡魔がやってくるだろう。

その前に勢い付けて布団から出る。子供っぽいカーテンを開ける。
朝日が目に刺さった。真新しい制服をハンガーから取ると　ドアを開け　二階へ上がる。
階段のドアを開けると目玉焼きの匂いが鼻に広がる。台所にはカリカリのベーコンとスライスした赤いトマトが乗せられてあった。
　寝ぼけてないで早くしたくしないと遅刻するよ。　後ろから忙しそうに母が走る。
あたしは　はぁい　と気の抜けた返事をし、押し入れに向かった。

押し入れは寒い。今日は四月にしては暖かいのだが、押し入れだけは寒かった。
雪解け水のような冷たい寒さを感じながらあたしはパジャマを脱いだ。
体が震える。
急いでYシャツを着る。一度も袖を通したことのないYシャツ。パリッとしていて固い。

続いてスカートをはく。リボンをつける。紺の靴下を履く。
全てが新しくて暖かい。この暖かさは新生活への高揚感。

制服を身に着けると、雪解け水など冷たくはなかった。押し入れを開け　洗面所へ向かう。
そこにはボサボサの寝癖に新一年生の顔をしたあたしがいた。
クシで髪をとかす。寝ぼけっ面に水を浴びせる。
母が向こうでせかすものだから化粧はやめて食卓へ行った。

案の定、今日のメニューは目玉焼き。箸で黄身だけを切り取って白米に乗せた。
膜を切る。半熟の黄身が白米に流れ出す。醤油を数滴垂らし　口にかきこんだ。

「楓、制服中々似合ってるじゃないか。」
父はそういうとあたしの隣に座り、リモコンに手を伸ばし音を二つあげる。お天気コーナー。
東京の気温は２０度。暖かい。花粉症の人注意。
活舌の良いキャスターの言葉を塊で聞き取る。あたしはトマトに箸を伸ばした。

入学式

見知らぬ風景が後ろに流されていく。次で降りると母に言われ、あわてて定期をだした。

受験で一回、合格発表で一回。この学校を訪れただけ。

あたしは受験に失敗した。

嫌いな理科が足をひっぱり、最悪の結果になった。泣きじゃくるあたしを塾の先生達は慰めてくれたが　結果は不合格だった。第一志望だった。喪失感が強いまま、第二志望のこの学校を受験した。

結果は合格だった。隣の女の子が受験番号と合格掲示板を照らし合わせ　泣いていた。

その表情を見た友達らしき女の子も一緒に泣いていた。受験番号を握りしめて泣きじゃくっていた。不合格した時のあたしも同じ表情をしていたのかもしれない。

特に思い入れのないこの学校の空をあたしはぼんやりと仰いだ。

「新入生？」

そう聞かれて振り向く。女の子だった。短い髪はさらさらとしてい

て艶がある。
ぱっちりとした目。スカート丈はあたしと同じくらい。後ろには保護者もいた。
この子と同じ年だと悟ったあたしは慌てて笑顔をつくり、うん　とうなずく。
ふいに風が吹いた。この子の艶やかな髪は揺れ、春の景色に映えた。
入学する生徒はこっちから行くみたい。一緒に行かない？　女の子はそういってあたしに微笑んだ。さばさばしてる子。きっと中学でたくさんの友達がいたんだろうな。
親に手を振り　あたしはこの子と体育館へ向かった。
「名前・・・まだだったよね。ウチはれいな。よろしくね。」
「よろしく！あたしは楓・・・あ、楓でいいよ。」
じゃあ楓って呼ぶね　れいなは笑った。
体育館に付くと鞄を開け　新品のうわばきに足を入れる。
つま先は深い青色。気に入っている。左側では在校生が生徒に封筒を配っていた。
封筒をもらい、中身を開ける。内容はクラス表と入学式の流れ、校歌の紙。
他のプリントには見向きもせずあたしは最初にクラス表を見た。
クラスはD組。出席番号２１番。

中学はC組しかなかったので高校がF組まである事がなんだか不思議に思えた。

あたりを見渡すとれいなちゃんが居ない。封筒を手渡されたときに逸れてしまった。

周囲を慌てて見渡すが見つからない。　一年生は立ち止まらずに奥へすすんで。

後ろから教師の声が聞こえる。人の波。

れいなちゃんのクラス知りたかったな　小さくため息を付き、あたしはクラスの席を探した。D組。パイプ椅子に張り付けられた紙を見つけた。席にはすでに数人の生徒が座っている。隣生徒に話しかけている人は居ない。皆、ケータイをいじったり、書類を読んだりしている。

あたしも出席番号が書いてある席に座る。まわりの子がしているようにケータイをいじった。

「楓！いた！」

ケータイから目を離すとれいなちゃんがいた。あたしの真後ろの席に座る。クラス表をあたしに見せて　同じD組だったんだね。　と笑った。

右手に持っていたケータイの存在を思い出した。

「ねぇ、アドレス交換しない？」

「いいよ。」

鞄からケータイを出す。キャラクターストラップついている。赤外

線交換をし。なんとなく嬉しかった。教員がマイクで話す。
生徒はクラスが書いてある席に座って。プリントを確認して。
これから式を始めます。一同　礼。一斉にお辞儀をする。
淡々とした式。校長がちょっと噛んだけど隣席はまだ知らない人なので笑うのはやめた。
マーチのような校歌を在校生が歌う。中学とはやっぱり違う。
式が終わると大量の人が各教室に帰る。あたしはれいなと教室を目指した。
式が長かった。担任の先生が怖そう。たわいもない会話が続く。
階段を二階分上がり長い廊下を進む。Ｄ組はずいぶん奥の方だ。
教室のドアを開けた。木製の教卓。古びたすのこ。綺麗な黒板。使われていないＴＶ。ここが教室なんだ。ここで毎日授業をするんだ。
出席番号が貼り付けてある机に向かう。椅子に腰かける。教室風景を見渡す。後から同じクラスの人が入ってくる。座る。会話がない静かな教室。

「全員そろったか？」

ドアを力強く開ける男性。確か担任の先生だった。

外見を見たところ年代はあたしの父親と同じくらい。

シワが目立つ。髪は白髪染めをしたのだろう。不自然な黒髪だった。

「さっきも紹介したが、このクラス担任を務める熊田だ。」

手慣れたように白チョークを取る。ゴンゴンと音を立てて黒板に自分の名前を書いた。

パンと手に付いたチョークをはたく。首を一回回す。　こんどは君たちの番だ。右側から順に自己紹介。名前と好きな物。事でも人でもいいぞ。　熊田先生は窓側の生徒を指さした。

右側から三列目だったあたしは慌てて自己紹介文を考え始めた。・・・好きな物

小さい頃から歌が好きだった。

歌って、まわりの人からうまいと褒められるのが嬉しかった。将来は絶対歌手になろうと決めていた。

綺麗な服を着て。ステージで立つ。たくさんの拍手の中歌う事に憧

れていた。

夢が崩れた明確な日付はない

中学に上がると部活に入った。テニス部だった。友達に入ろうと誘われて入った。
まわりの人達とも上手くいっていて楽しかった。充実していた。
そして忙しかった。朝五時に起きて支度をした。
日が暮れるまでボールを追いかけた。そうしたら知らない間に歌手の夢が消えていた。
生活していく日々の中でなれっこない夢というものを知った。
普通の人が送る日々を学んだ。あたしはそっちを取った。

「あたしは氷川楓。趣味は音楽鑑賞。ロックが好きです。」

何も変哲のないつまらない人間になっていた。

ケータイカメラ

入学式から二日。行き方は迷ったが何とか高校に来れた。
教室のドアを開ける。昨日よりも空気が柔らかかった。

「楓！おっはよ！」
れいなちゃんに呼び止められた。横にはもう一人の女の子。
髪はセミロング。目は細い。ニキビが目立つ。遠慮がちにあたしに目を合わせた。
同じクラスの子。さっき仲良くなったんだけど、ゆみって言うんだよ。　れいなちゃんが紹介するとゆみという女の子は小さくおじぎをした。
あたしは鞄を机に置く。　隣いい？まだ時間あるし話そうよ。　れいなちゃんが言う。隣机から椅子をかりた。ゆみちゃんも前の席から椅子を持ってくる。
どこ中？　部活やってた？　初対面らしい会話が続く。
すると教室から女の子達が数人入ってきた。皆すごく派手め。巨大なシュシュをつけ、髪はお団子や巻いている子。汚く染められた茶髪。つけまつげ。スカート丈は短い。Yシャツからはネックレスが見える。香水の匂いが頭を痛くした。
あたしはこういう女の子が少し苦手。オシャレには縁が無いと思っていたからなのか。
れいなが手招きすると女の子達はこっちへきた。ピンチ。体が硬直してく。

だが女の子達はあたしとみると明るく挨拶をした。

「おはよー。何か今日暑くね？」

「う・・・ん？」

驚く。思ったよりも優しい。

「何その語尾疑問形―！ウチさ。美紀っていうんだけど、名前なんて言うの？」

「えっ・・・？あたしは楓。」

「マジ？ウチの友達にも楓って子いた！偶然―！」

マジで？親戚じゃね？　美紀ちゃんが言うと巻き毛の子が

名前は親戚関係ねーよバカ　笑いながら言う。その会話を聞いてなんだか可笑しかった。　言葉づかいは汚い。けど何となく話しやすそうと思った。

「れいな、ゆみ、楓。トランプ持ってきたからやらね？」

「うん。いいよ！やろ！」

笑顔で答えた。　二日目でトランプを持ってくるなんて。すごいな。

れいなちゃんが呟くと美紀ちゃん達は笑ってた。

不意に肩を叩かれる。

「ねぇ・・・私達も一緒にトランプしてもいい？」
振り向くと数人固まって女の子達が居た。髪は結っている。黒髪。スカート丈はあたしと同じくらい。緊張した様子で話しかけてきた。

「いいよ！皆でやった方が面白いもんね！」
さぁ入って入って。あ、机増やそうか。椅子足りる？　賑やかに話す雰囲気。
一人一人の会話。まるでメロディーのように心地よかった。

昨日まで静かだった教室。けれど今日は心地いい。
大人数でババ抜き。　ゆみちゃんはどんどん手持ちが少なくなる。
凄いな。
皆楽しそうにカードを取る。クローバー。ハートの7。スペード。

あたしも笑顔になる。
中学卒業後、高校生活が不安だった。高校は未知の世界。そう思っていた。
けど違う。皆もしかしたら同じ不安を抱えていたのかもしれない。

「よっしゃ！ウチ上がり！終わりー！」
嬉しそう。美紀ちゃんは伸びをする。その後、何人か続いて上がった。
あたしはまだ。ハートの6が上がらない。

まわりが終わっていない事を見ると美紀ちゃんは暇そう。ブレザーからケータイを取る。
思いついたようにケータイをいじる。
写真とるー　美紀ちゃんはそういうと教室の隅に行った。

美紀ちゃんは教室の隅に行く。風景を取るのだと思った。

違った。
カチャリ　ケータイカメラの音が響く。女の子めがけて。

一人。読書をしている女の子。隅で静かにしていた。

その子を美紀ちゃんは撮った。トランプをしていた巻き毛の子も便乗した。
トランプを放り出した。美紀ちゃんの所に行く。

二人ともピースをしてた。ピースして女の子の近くで撮った。

笑ってた。爆笑してた。さっきあたしと話してた笑顔じゃない。

残酷。恐怖。非情な笑顔。

「佐々木あゆみだっけ？あの子」
れいなちゃんが女の子を見て笑った。嘲笑うに近かった。
怖い。鼓動が早くなる。動脈がドクドクと言っている。

「なんかキモいよね。ブスだし。」

「わかる。地味だし。」

「話したくないよね。」

「無視しよ。」

繰り返されるひどい言葉。皆低い声。バカにした笑い声。

ケータイカメラの音。

数分前まで仲良くなりたいと思ったこの子達が急に怖く感じた。

あたしは信じられなかった。さっきまで楽しくトランプをしてた。
なのに今ここで。あたしの席で。皆一人の女の子の悪口を言っている。美紀ちゃん達はカメラで撮っている。

悪口？違う。これは。

いじめだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6373y/

あたしたちはがむしゃらに生きていくんだ！

2011年11月29日00時54分発行